

琉球語の比較言語学的考察

-新カラジ<頭髮>考-

橋尾直和

(2008年9月29日受付, 2008年12月15日受理)

A Comparative Linguistic theory of the Ryukyu Language:

New theory of etymology on "Karazi(hair)"

Naokazu HASHIO

(Received : September 29, 2008. Accepted : December 15, 2008)

要 旨

琉球語の「カラジ (頭髮)」の語源説は未だ定説がない。本稿は、これまで語源不詳とされてきた、「カラジ」の語源を明らかにすることを目的としている。琉球語と古代朝鮮語、中国語との比較を中心に語源解釈を行い、語源について新説を提唱した。筆者は、「カラジ (頭髮)」の語源を、古代朝鮮語*karakと中国語*dzuの混交形の異形であると結論づけた。

キーワード：カラジ、語源論、琉球語、古代朝鮮語、中国語

Abstract

"Karazi(hair)" of the Ryukyu language has had no established theory of its origin yet. This paper reveals the unknown origin of "Karazi(hair)". The new theory about the origins of this word will be proposed through comparison between the Ryukyu language, Old Korean and Chinese. I conclude in this paper that "Karazi (hair)" is the variety of the mixture of Old Korean "karak" and Chinese "dzu".

Keywords : Karazi, etymology, the Ryukyu language, Old Korean, Chinese

1. はじめに

琉球語を他言語と比較・考察した文献に、村山 (1981b)・村山 (1995)、中本 (1992) が挙げられる。前者は、主にオーストロネシア語とアルタイ諸語との比較であり、後者は、東アジア周辺諸語との比較である。筆者は、橋尾 (2007) において、琉球語の「グスク」「ニライ・カナイ」の語源解釈を試みた(1)。その結果、琉球語の成立に当たっては、オーストロネシア語とアルタイ諸語のみならず、朝鮮語と中国語の影響が濃厚であることが判明した。村山七郎氏と中本正智氏の両氏は、琉球語に関する語源解釈の中で、「頭髮」を表すカラジを扱っているが、筆者の語源解釈とは見解が分かれる。本論では、「頭髮」を表す琉球語を取り上げ、琉球語の成立に当たって、他言語との言語接触の観点に立脚した語源解釈を展開したい。

2. 新カラジ<頭髮>考

まず最初に、琉球語の「頭髮」カラジkaradʒiの語源説について、中本(1981)、村山(1981b)の記述から検討することにしたい。

①中本正智説

中本(1981) p.44において、中本氏は、カラジの語源を次のように解釈している。

沖縄では「髪」をカラジkaradʒiという。一見、日本語と無関係のようであるが、語源は何だろう。カラジは、「カラジ アラユン」(髪を洗う)のように「頭髮」だけを表し、「毛一般」はキーki:という。ではカラジはもともと「頭髮」を表す語であったかという点も必ずしもそうではない。「頭」を表すカラジが沖縄北部や与論島・徳之島にみられるからである。とすれば「頭」を表していたカラジが次第に意味変化を起こし、遂に「頭髮」を表すようになったのではないか。

沖縄中南部にも、「頭」を表すカラジの例が断片的ながらある。チーカラジヌ ヤムン(頭が痛い)という慣用句(イディオム)の中のカラジは「頭」の意を保っているとみてよい。

「頭」を表すカラジの語源を検討すると、カシラ(頭)であることがわかる。音位転倒によってka.fira → kara.fi → karadʒiのようにfiとraが位置を変えたのである。

②村山七郎説

村山(1981b) pp.28-30において、村山氏は、カラジの語源を次のように解釈している。

首里のkaradʒi「髪」と同じものは沖縄本島の名護、屋良、糸満方言に見られ、これに近いのは徳之島のkaradzi、宮古の平良のkaradzu、沖永良部のkaradziがある(宮良、1980年、p.180ff.)。

ところが、徳之島ではkaradziは「髪」のほかに「頭」の意味があり(宮良、同上、p.180)、どうやらカラジはもとは「髪」ではなく「頭」だったと思われる。首里方言で「髪」をカラジというだけでなくカラジギーkaradʒigiと言うところを見てもそう思われる。ギーは「毛」であって、カラジギーは頭・毛だったろう。しかも、1450年ころに成ったと見られてきた『琉球館訳語』及び1535年に成った『使琉球録』には「頭」は嗑藍子ka | lan | tsiとあり、また1501年の『語音翻訳』を見ると「頭 가난今」kananzü(これはkaranzuまたはkaranʒuを表す)とあって、カラジが「頭」であることは疑いない。『語音翻訳』では「髪」は今と同じくカシラとなっている。

(中略)

この点を見ると『語音翻訳』の가난今はkananzüを表した可能性が大きく(karanzuではない。もしそれならば、上述のように現在karandziとなるはずだ。実際はkaradʒiである)、そして、このʒuは-n-によって有声化した可能性が大きいから、もとは*karanzu^{カランシュ}であったろう。そして、後者はkara | N | ʒuという構成だったであろう。-N-はノの収約形であるが、カラは何か、ʒuは何か、ということになる。

首里方言でkara(アクセントは下降型)「体格」ということばがある。これは日本語カラ・ダ(身体)のカラに対応する。シュ〜シューは『混効験集』の「主上之御事」を表すおしゅ^{カナシ}加那志くお主カナン(いとしいお主。敬愛するお主)のシュ(主)と見られる。現代首里方言のsju:(ʒu:) (アクセントは平板型)「父。おとうさん。平民の父をいう。平民の父の名称および呼称」も主^{シュ}に由来するのではあるまいか。ただしアクセントの見地からすれば、この解釈に問題が残る。

kara N ʃu: > kara N ʃu > karadʒi (体格ノ主)
 (下降型) (平板型) (平板型)

このように見ると、琉球諸方言のカラジは日本語と共通の単語に由来するのではなく、比較的後期に琉球語が自ら創造した語形ということになる。

これまでカラジの分析は行われてなかったようで、私たちは『語音翻訳』その他の資料の助けをかりて、その語構成を分析し、それを上のように解釈した。

筆者は、村山 (1981b) p.27にあるように、カシラのシとラが入れ替わってカラジになったとする中本説は採らない。仮に音位転倒を認めたとして、カシラがカランになるだけで、カラジになることは考えられない。また、村山説にある『語音翻訳』の가난쑤는今はkananʃuを表した可能性が大きく (karanʃuではない。もしそれならば、上述のように現在karandziとなるはずだ。実際はkaradʒiである)、そして、このʃuは-n-によって有声化した可能性が大きいから、もとは*karanʃuであったろう。そして、後者はkara | N | ʃuという構成だったであろう」という語源説も採らない。村山説の問題点は、アクセントの不一致の問題もあるが、『語音翻訳』の記述からの再構形をkananʃu < *karanʃuと解釈したところにある。

ここで、文献に現れるカラジに関する表記について、整理しておきたい。

◇「頭」の意味:

『語音翻訳』「頭 가난쑤」、『琉球館訳語』「頭嗑籃子」、『音韻字海』「頭嗑籃子」、『中山伝信録』「頭他喇子」

◇「頭髮」の意味:

『語音翻訳』「頭髮 카시라」、『琉球館訳語』「髮 加籃」、『音韻字海』「髮 嗑十藍其」、『中山伝信録』「髮 哈那子又喀拉齊」、『使琉球録』「髮 加藍」

「頭髮」を表す琉球語のカラジkaradʒiの語源解釈を、朝鮮語と中国語との比較によって試みた結果、次のことが分かった。まず、『語音翻訳』(1501)の記述によって、首里方言のカラジ karadʒi は 15・6世紀には *kara^hdzü (*kara^hdzi) あるいは*kana^hdzü (*kana^hdzi) であったことが推定される。だとすれば、*dzü (*dzi) は、さらに *dzuにさかのぼる可能性がある。宮古方言のカナマズ kanama^hiは、「頭髮」を表す朝鮮語の*mərikharakの逆語序と見る。

*kara < *karakは朝鮮語の「長く分岐したもの」、*məriは「頭」の意味である。この「頭」の部分に中国語の*dzuが接続したものが、カラジ karadʒi であると考えられる。

李 (1988) pp.142-144には、「*kar- (枝・線) 語根の根源的意味」として、以下の語源解釈が挙げられている。

韓国語の*kar- (交替形*kat-) 語根からの派生語をしらべてみると、*kar-の根源的な意味は「線條」をあらわすと同時に「分派」の意味を兼ねていることがわかる²⁾。

(中略)

「脚」を意味するkaraŋi (가랑이、脚) だけでなく、人体語の中で、身体から分かれ出た線条的なものはkar-ak (가락、線條) の名称がついているのは、*kar- (線・分) 語根の意味がはたらいているからである。「手指」はson-karak~son-korak (손가락~손고락)、「足指」はpal-karak~pal-korak (발가락~발고락)、毛髪はməri-kharak (머리카락、頭髮) である。「手指・足指」を意味する-karak (-가락) はそのかたちの共通点のために、容易にうけいられるが、髪の場合は、音相も-k

harak (-카락) と有気音をもち、もののかたちも糸のように細く、手足についた-karak (-가락、指) とは、機能の面でもちがっているので、別のことばと疑ってみるが、やはり頭部についた（そこから分れ出た）線条形のものだという点で、頭髪のmeri-kharaは、meri-（頭）*kharakからきたものと理解されるのである。

以上の記述から、*kara < *karakが朝鮮語の「長く分岐したもの」であることが推定できる。したがって、カラジの語構成を*karak（長く分岐したもの）| *dzu（頭）と考える。

筆者は、以下の音韻変化を推定する⁹³。

*karak | *dzu > *kara*dzü > *kara*dzi > karadzi
 > *kana*dzü > *kana*dzi > *kanatsi > *kamatsi > kamatji

もともと「頭髪」の意味を表していたカラジkaradziが、意味のずれによって「頭」の意味を表すようになった。そして、カラジの異形としてのカマチkamatjiも「頭」を表すようになったと考えられる。さらに、カマチは「頭」から「顎」に意味推移を起こしたものと思われる。宮古方言では、「頬」の意味に用いられている。

原形のカラジは、もとの「頭髪」の意味を残すとともに、「頭」の意味をも持つに至った。カラジとカマチは *karak（朝鮮語）+ *dzu（中国語）の異形と思われる。

このカラジをカラ+ジという語構成とみなす語源解釈を支えるものとして、「臍」の意の語がある。奄美大島、石垣島でカラスネ、沖縄本島、宮古島でカラシニである。「向こう臍」の意の語としては、首里方言でカラスニがある。東北の青森・岩手・秋田方言では、逆語序のスネカラである。「スネ」は、もともと「膝・膝頭」を表したようであるので、カラスネは、「膝から長く分岐したもの=臍」という解釈が成り立つ。

古代朝鮮語に「ウトゥ・マリ」という「頭」を意味する語があるが、utu ウトゥも meri マリもどちらも「頭」という意味で、「頭」の意の語を二つ重ねて、それをも「頭」という意味で使用する「重複語」である。

この utu | meri の u が a と交替し、ata | mari となり、ri が脱落したのが、atama（頭）である。また、*utu | meri > *otu | muri > otu | muri オツムリ > otumu オツム と変化したのが、幼児語としての「頭」を意味する「オツムリ」「オツム」だと思われる。

「頭」を表す語は、喜界島でハマチ、奄美大島でカマチまたはツブル、徳之島でウッカシまたはカラジ、沖永良都島ではチブル、与論島ではフラジである。

喜界島のハマチは、カマチからハマチへのk>hの音韻変化、奄美大島のツブル、沖永良都島のチブルは、

otumuri > utumuri > utuburi > tuburi > tuburu > tsuburu > tsiburu > tʃiburu

の音韻変化を推定する。

徳之島のウッカシは、朝鮮語の*mərikharakの*məriの部分に*utuを当てた*utukaraを出発形とし、*utukara > *utukana > ʃukkaŋの音韻変化を推定する。

3. おわりに

語源不詳とされてきた琉球語のカラジ（頭髪）の語源解釈の結果から、琉球語の成立過程において、古代朝鮮語と中国語の接触が関与していることが分かった。特に、基礎語彙のうちでも身体語彙である「頭

髪」「頭」の語源が、古代朝鮮語と中国語が関わっている事実は、琉球語の成り立ちにおいて、単なる日本語方言の分派と捉える従来の解釈は、修正されるべきではないかと考える。

源がひとつで、分岐して語形変化した結果が現在の姿であるといった、系統樹的な発想で琉球語の成立を解釈できないのではないか。琉球語もひとつではない。多くのバリエーションが生まれた背景を説明するには、言語と言語が接触することで新しい語が生成される、といった接触言語的要素をひも解く作業が必要ではないだろうか。一元的な語源解釈では、琉球語を説明することは難しいと言える。

今後は、接触言語の観点から、語彙のみならず、琉球語のアクセント・文法面での成立過程の研究を進めていきたい。

【注】

- (1) 橋尾 (2007) pp.272-286において、グスクの語源は、出発形として「城塞」*kui (古代朝鮮語) -sək (中国語) と再構されること、ニライ・カナイの語源は、ニライがギライに遡り、さらに原始オーストロネシア語laŋit'に遡ること、カナイのカナがハナに遡り、さらに古代朝鮮語ハナ_hhanalに遡ると解釈とした。このことから、ニライ・カナイは、ニライとして南方系である原始オーストロネシア語的要素が先にあり、カナイとして古代朝鮮語が接触して成立した可能性があることを示唆した。
- (2) 筆者は、李男徳氏とほぼ同時期に、頭髪のmēri-kharaは、mēri- (頭) *kharakからきたものと解釈し、「手指」のson-karak~son-korak、「足指」のpai-karak~palkorakの*karakも*kharakと同じく「長く分岐したもの」と解釈していたことになる。
- (3) 日本言語学会第101回大会 (1990) 口頭発表要旨において、再構形を*karaNdzuおよび*ka-ratsuとして、linkerのNの有無で2系統を考えていたが、今回はこの解釈を採らない。Nの部分は、^hdzuのようにダ行音に現れる前鼻音と解釈する。

【参考文献】

- (1) 李 男徳 (1988)『韓国語と日本語の起源』学生社(2) 泉井久之助 (1975)『マライ=ポリネシア諸語—比較と系統—』弘文堂
- (3) 沖縄古語大辞典編集委員会編(1995)『沖縄古語大辞典』角川書店
- (4) 川本崇雄 (2007)『オセアニアから来た日本語』東洋出版
- (5) 具志堅敏行 (2007)『琉球語は古代日本語のタイムカプセル』那覇出版社
- (6) 小泉 保 (1998)『縄文語の発見』青土社
- (7) 藤堂明保編(1978)『学研漢和大辞典』学習研究社
- (8) 中本正智 (1981)『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社
- (9) ——— (1978)『琉球語彙史の研究』三一書房
- (10) ——— (1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店
- (11) ——— (1992)『日本語の系譜 (新版)』青土社
- (12) 橋尾直和 (1990)「琉球語の比較言語学的試論—カラジ〈頭髪〉考—」『日本言語学会第101回大会口頭 発表要旨』日本言語学会
- (13) ——— (2007)「東アジアにおける琉球語・アイヌ語・日本語諸方言の比較研究」『声とかたちのアイヌ・琉球史』森話社
- (14) 宮良當壯 (1926)『探訪南島語彙稿』(『宮良當壯全集7』1980) 第一書房

- (15) 村山七郎 (1975) 『国語学の限界』弘文堂
- (16) ——— (1978) 『日本語系統の探求』大修館書
- (17) ——— (1979) 『原始日本語と民族文化』三一書房
- (18) ——— (1979) 『日本語の誕生』筑摩書房
- (19) ——— (1981a) 『日本語の起源をめぐる論争』三一書房
- (20) ——— (1981b) 『琉球語の秘密』筑摩書房
- (21) ——— (1988) 『日本語の起源と語源』三一書房
- (22) ——— (1995) 『日本語の比較研究』三一書房
- (23) 李 基文 (村山七郎監修・藤本幸夫訳) (1975) 『韓国語の歴史』大修館書店
- (24) Dahl, O.Ch. (1977) Proto-Austronesian. Seconded. London
- (25) Dempwolff, O. (1934) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. I. Band. Berlin, Hamburg
- (26) ——— (1937) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. II. Band. Berlin, Hamburg
- (27) ——— (1938) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. III. Band. Berlin, Hamburg
- (28) Wurm, S.A and Wilson, B. (1975) English Finderlist of Reconstructions in Austronesian Languages
(Post-Brandstetter). Canberra